

留学生からのたより

ドイツ

佐藤 誠司

謹啓 このたびは、奨学生とならせて頂き、本当に有難うございました。授与式の際には、母が過分なおもてなしと励ましのお言葉を頂いたと感激しておりました。本当にお礼の言葉もございません。この御恩に報いるために私が成すべきことは、ひたすら学問に打ち込み、真理を追究することと、決意も新たに努力する所存でございます。

また『成寿』21巻と励ましのお言葉、有難うございました。『成寿』は日本でも読ませて頂きましたが、異国で読むのもまた格別です。理事長のお考えと実行力に改めて尊敬いたすと共に、善光寺に集う方々の、深い信仰心や厳しい修行の姿に大変感銘いたしております。そして私が頂いた奨学金がいかに有難く貴重なものかということを中心に刻ませて頂きました。

いずれ帰国の際に改めて御挨拶申し上げますが、まずは書面にてお礼を申し上げます。本当に有難うございました。 敬 具

1993年7月27日

留学生からのたより

オランダ

早川 敦

理事長先生におかれましてはますます御清栄のことと御推察申し上げます。

6月半ばから試験期間で、本日最後の試験が終わりました。結果のわかっているものは全て合格しております。結果のわかっていないものについても、おそらく確実に合格はしていると存じます。9月からはヴェーダの演習とサンスクリット文学の演習に出席し、更に修士論文を提出する予定であります。論文のテーマは、ヘーステルマン、ボーデヴィッツ両教授と話し合いまして、ヴェーダ期の葬送儀礼について考察するということになりました。もしできれば他の儀礼のデータと併せて、ヴェーダ期の社会組織について研究したいと存じます。もしヴェーダ期の社会構造が明らかになれば、初期仏教の研究にも新しい光を投げかけることができるかと存じます。先行する研究としてはカーラント、辻直四郎などの研究がありますが、それらとは若干違った切り込み方を構想しております。

これから大学は夏休みに入りますが、夏の間はヘーステルマン教授と個人的に勉強する予定です。

まずは御報告まで。末筆となりましたが、理事長先生の一層の御健康をお祈り申し上げます。

謹言

1993年7月15日

留学生からのたより

曜日を除いて毎日夕方6時から2時間ずつ文法学に関する書物を読んでおりますが、今年7月からはすこし欲を張りまして毎朝6時にインド六派哲学の講読をも開始いたしました。

パンディットといえば、インドの伝統的な知識人、しかもサンスクリット語に関しては最高度の知的能力を備えた人に対して、半分尊敬を込めて呼ぶ名前です。韓国や日本でいう伝統的な漢学者に当たると思いますが、ブラフミン階級の人の中でも特異な存在でして、子供の頃から「グルクラ (gurukula)」と呼ばれる師の家に寄宿しながら、師のもとでヴェーダを始め史・文・哲などを学ぶそうです。修学のために少なくとも20年以上の年月を要するそうですから、彼らの一生それ自体がインド精神史の生きている証人になるわけです。いつか機会があれば、彼らの人生遍歴記みたいなものを描きたいと思っております。時代の波に押し流されてそのような伝統的な知識人が消えてゆくのを目の前にするのは私としてはあまりにも悲しいことです。勉強を始めて以来ずっと彼の肉声を録音し続けてまいりました。あと20年ぐらい経ったら、インドでパンディットという存在はもはやなくなるでしょう。

季節の変わり目で気候が不順の折り、くれぐれも御身大切になさいますように。

敬 具

1993年7月19日

留学生からのたより

インド

李 鐘 徹

平素は学業のためにご無沙汰いたしておりましたて申し訳ございません。

ここマイソールはうだるような暑さを終え、本格的に梅雨の季節に入っております。先生は相変わらずお元気でしょうか。お陰さまで我が家族はみんな元気に過しております。

さて、先生のありがたいご恩を受けてインドで研究生生活を始めてもう一年近くになりますので、ここ一年間の研究状況をご報告をもちかねて申し上げたいと思います。

昨年11月、マイソール大学のサンスクリット学科に研究員として登録して以来、奨学金の申請書に申しあげましたように、私の研究活動は主に博士論文の完成とサンスクリット文法学～パーニニ文法学～の修学という二つの分野に向けられています。

博士論文（世親思想の研究～『釈軌論』を中心として～）の執筆は順調に進んでおります。今年度の末までは文献学的な基礎作業を終える見込みですので、すでに部分的ではありますが本文の執筆に着手しており、来年（1994年12月）東京大学に提出する予定でございます。

文法学の修学はサンスクリット語で書かれた仏教註釈文献を読むために必須となりますが、昨年12月からあるパンディト (Paṇḍit) に付いて個人教習を受けております。コミュニケーション手段がサンスクリット語しかなくて、初めの頃はずいぶん苦勞いたしました。日